

特別科学学級

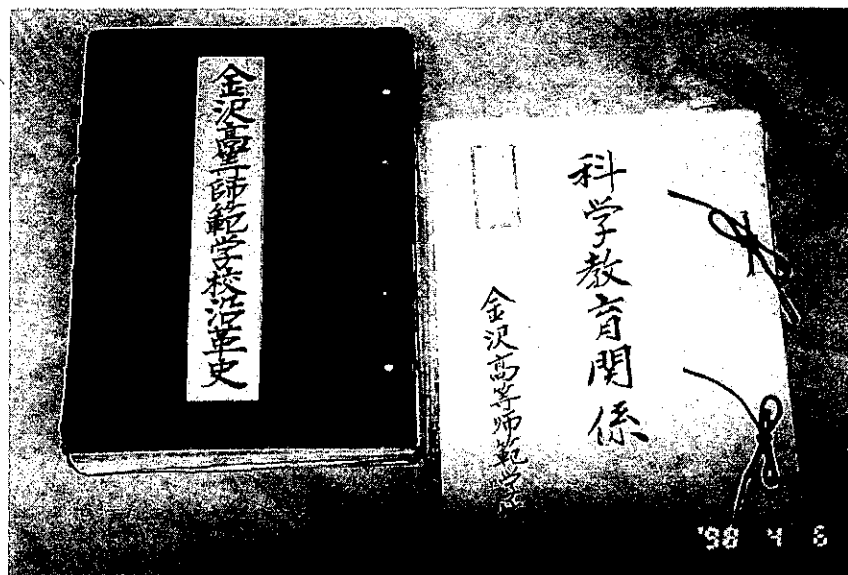
附属高校の五十年の歴史を語るとき、その前史である特別科学学級のことを抜きにすることはできない。

昭和十九年（一九四四）十二月、文部省の指定により特別科学教育研究班が金沢高等師範学校内に置かれた。「科学ニ関シ高度ノ天分ヲ有スル学徒ニ対シ特別ナル科学教育ヲ施シ我国科学及技術ノ飛躍的向上ヲ図ランガ為之ガ実施ニ関スル方途ヲ研究セントス」との方針のもとに設置されたものである。特別科学学級とはその教育対象となるクラスのことである。旧制中学生と国民学校四、六年生が対象となった。

昭和十九年末といえ、すでにマリアナ諸島を失い、本土空襲が本格化しはじめた時期である。特別科学教育研究班は、米軍の圧倒的物量と技術力に対し、科学技術の飛躍的発展による起死回生の戦局の転換を願って設置された。設置箇所は全国五ヶ所、金沢高師のほか、東京、広島各高師、東京女子高等師範、京都府立一中である。金沢の研究班では班長に校長の倉林源四郎自らが就任した。特別科学学級生徒・児童は勤労働員が免除され、上級学校への進学を保証するという破格の扱いであった。

中学校特別科学学級第一回生には、翌二十年一月、当時の金沢一中第一学年二百名の中から十六名が入学した。選抜には試験がなく、学校当局からの指名であったという。のち四名が編入して二十名となった。二十年四月入学の第二回生は二十九名、二十一年入学の第三回生は十六名であった。

科学学級のカリキュラムは、国語、地理、国史の文系科目が大幅に縮小され、数学、物理（物理・化学）、生物の理数系科目が強化された。着目すべきことは、当時、敵国語として排除された英語が重視されたことである。科学学級の生徒は午前中、金沢一中でこれ



【科学教育関係資料】・【金沢高等師範学校沿革史】 金沢大学理学部所蔵

ら教科の授業を受け、午後には徒歩で中村町の高等師範学校に出向いた。ここでは、高師の教授陣から直接、物理・化学の実験、生物の実習に重点を置いた理数科の高度な教育を受けた。その程度は、「高等学校（旧制）第二学年修了迄の全教育内容を中学校四学年卒業までに理解把握させる」というものであり、数学の内容を例にあげれば、第一学年で関数、対数、第三学年で導関数、積分、微分方程式を学ばせようと計画していた。また、実験、理科工作を重視した点も特徴である。物象の授業では「氷の密度を知る実験方法を種々工夫させ、その中で最も簡単な方法で実験させる」などが実施された。

日本の敗戦は、軍事目的で創設された科学学級の大きな転換点となった。金沢高師でも状況の変化に対応すべく「国民生活を飛躍的に向上させ、世界の平和に寄与すべき新科学文化を創造」とする目的を変更するなど努力している。しかし、結局は「戦後の国内事情の著しい変化」の中で文部省の通達により昭和二十一年度で解散となった。ただ、文部省は「科学的素質の優秀な児童生徒に対し、その天分を伸ばすような教育を施すことは科学振興の上から見ても甚だ大切なことであるから、地方によりまたは学校により自主的に特別の教育を施す」ことを認めた。それを受けて科学学級生の多くが編入したのが、昭和二十二年発足の金沢高等師範学校附属中学であった。戦争の落とし子ともいえる「特別科学学級」、これが附属高校五十年の母体である。

なお、特別科学学級に関する研究には『もう一つの終戦秘話 特別科学組―東京高師附属中学の場合―』（佐々木元太郎・平川祐弘）、「特別科学教育班―理科教育のひとコマ―」（金崎肇 金沢大学教育学部紀要一五号）、「特別科学学級の実施から打ち切りまで」上・下（鈴木一正 福岡教育大学紀要四〇号・四四号）がある。また、本書資料編には、金沢大学理学部所蔵の「特別科学学級」関係資料を掲載してある。



特別科学学級 実験風景 金沢大学資料館所蔵